★美山、与謝野モニターツアー

（1）実施概要

【 日　時 】平成 27 年 2 月 19 日（金）13:00 ～ 2 月 21 日（日）17:00

【参 加 費】10,000 円（宿泊費、食費として）

【 宿　泊 】1 泊目　田歌舎（京都府南丹市美山町田歌上五波 1-1）
2 泊目　かや山の家（京都府与謝郡与謝野町字温江 1401）

【現地対応】野生復帰計画（与謝野町観光協会）

【設定料金】50,000 円　※2 泊 6 食・通訳付、交通費別（実費から算出）

【 概　要 】京都では、短期日本滞在の外国人をターゲットにして、美山町（森の京都）と海の京都のグリーン・ツーリズム、暮らし体験複合メニュー企画、実施予定。美山町では、猟師とともに山野を歩き、雪山での暮らしと狩猟を体験し、地元食材を食すること中で参加者が出会い、学ぶ活動とする（昨年度も実施）与謝野町では、「織物」「造り酒屋」といったモノづくりのある生活に触れる活動を実施する。

【 目　的 】地域で予約・問い合わせ、調整等を担う窓口づくり、滞在プログラム造成とその検証となるモニターツアー開催（5 カ所）26 年度に引き続いて、地域の受入プログラムの企画造成を地域とともに丁寧に進め、その検証としてのモニターツアーを実施。外国人の視点から、アドバイスを引き出すものとする。今回は、特に受入団体としてのＤＭＯ機能拡充を重視。すでに機能しているところ以外は、協働による育成を心がける。また集客についても事後の実践に活かせるよう、地域に合わせて予め外国人集客ができるメディアとの連携をとるものとする。加えて、地域の良さ、特徴を伝えるための戦略的事業コンセプト整備、地域の人気コンテンツの確立とブラッシュアップを重点目標とする。

（2）参加者ならびに同行者

○参加者

国籍	年齢	性別	職業	備考
インドネシア	21	F	学生	ハラル
インドネシア	20	M	学生	
ニュージーランド	44	F	自営業	
イスラエル	37	F	博士課程学生	
日本	40	F	旅行代理店	
オーストラリア	24	M	ツアーデザイナー	
アメリカ	30	M	旅行業	

※全体で 15 名の応募があったが、申込後のキャンセルが発生し 7 名の参加となった。

○同行者

・福井 隆（東京農工大学 / 日本エコツーリズムセンター理事）

・伊藤 博暁（日本エコツーリズムセンター事務局）

(3) プログラム及び概要

◇1 日目（2 月 19 日）

時間	場所	内容・説明など
13:15	京都駅	参加者集合・点呼（※参加者が 15 分遅れたため）
13:20	バス移動	車内でオリエンテーション
15:00	かやぶきの里	【かやぶきの里】 ・美山町を含めた 5 つの地区が 2006 年に合併して現在の南丹市へ。 ・かやぶきの里のある北村地区は 50 戸中 38 戸が未だにかやぶき屋根の家に住んでいる。 ・かやぶき屋根のふき替えは 20～30 年ごと。1 面ずつ行う。 ・かやぶき職人は美山に 2 軒しかない。 ・昔は地元のかやを使っていたが、現在では他の地域から持ってきている。 ・30 年前にかやぶき屋根保存の声が上がったが、それに乗ったのは北村地区だけ。現在では美山に来る観光客のほとんどがまずここに来る。 ・1993 年に国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。
15:20	バス移動	
15:40	八坂神社	旅の安全祈願のため、神社へお参り。 参拝の仕方や地域の信仰について話を聞く。 【八坂神社】 ・この地区の山の神様は女神であり、毎年、7 月 10 日前後のお祭りの際には男性が女装して舞を舞う。
15:55	バス移動	
16:00 16:30	田歌舎	チェックイン 田歌舎の自給的な暮らしを紹介。 【田歌舎の自給的な暮らし】 ・水は山の湧水を引いてきて、タンクで寝かせて使用。 ・葉物の野菜はハウスで育てている。 ・お米や野菜は貯蔵庫で保管。 【鹿の解体】 ・後ろ脚を片方吊るし、後ろ脚から頭に向かって皮を剥いでいく。 ・関節にナイフを入れながら部位ごとに解体。 ・慣れると 1 頭あたり 30～40 分くらいで解体できる。
17:10	バス移動	
17:30	美山町自然文化村 河鹿荘	入浴
18:00	バス移動	
18:30	田歌舎	夕食。田歌舎スタッフとの交流会。 美山町の暮らしと狩猟に関するレクチャー

◇2 日目（2 月 20 日）

時間	場所	内容・説明など
8:00	田歌舎	自給的暮らしの朝食。
9:00 9:30 11:00 12:15		狩猟体験 ・オリエンテーション 【狩猟】 ・必要な装備は鉄砲、猟犬、GPS、トランシーバー。 ・美山では 11 月 15 日～翌年 3 月 15 日までが猟シーズン。 ・それ以外では害獣駆除として請け負った分だけ猟をする。 ・移動 ・作戦の説明 【作戦】 ①猟犬を山に放ち、鹿を追わせる。 ②鹿は走り疲れてくると沢に降りてくるので、出現の可能性の高いところ（イチマチ、ニマチ）から順に打ち手を配置。 ③GPS で猟犬の動きを確認しながら、待ち伏せる。 ・第 1 ゲーム開始 ・第 2 ゲーム開始 ・ふりかえり
12:30		移動
12:50	田歌舎	昼食。鹿肉のローストとカツ。
13:40	バス移動	美山を出発
15:20	阿蘇シーサイドパーク	※雨のため、天橋立見学は中止。 与謝野町の歴史、文化、気候、風土について話を聞く。 【野田川～阿蘇海と鮭】 ・野田川の鮭は 1,300 年前から奈良に献上されていた。 ・一時は、阿蘇海への生活排水流入が問題視されいたが、市民運動が起こり、現在では市民の努力により環境が守られている。 ・阿蘇海に流れ込む野田川は市民の生活に近い川にも関わらず、鮭が遡上し、卵を産卵する。 ・放流をしない、天然の稚魚が確認できたのは与謝野町が初めて。 【与謝野町】 ・死火山である大江山から出る湧水が野田川に流れ込み、米作りや酒作りに使われている。 ・一年を通して湿度が高く、この湿度がちりめんを作るのに重要。家庭ごとに湿度が違うため、ちりめんの縒りも違う。蚕産業も盛んであった。 ・酒、食材、ちりめんを天皇家に献上していた。 ・古墳が多く、そのことから天皇家に所縁のある豪族が多かったことが伺える。
16:20	バス移動	

16:45	与謝娘酒造	酒蔵の社長で杜氏でもある西原さんより、酒蔵での生活や酒作りについてお話を聞く。麹室の見学や醸造樽の攪拌など普段はなかなかできない体験をする。
18:10	バス移動	
18:20	かや山の家	チェックイン
19:00	地元の方との交流会	与謝娘酒造さんや地元農家さんとの交流夕食会

◇3 日目（2 月 21 日）

時間	場所	内容・説明など
7:30	移動	まさ農園まで歩いて移動
7:45	まさ農園	農家での朝食作り。 農家の暮らしや風土を体験。
9:15	移動	かや山の家へ、出発準備
9:30	バス移動	
9:50	与謝野町観光協会	
10:00	ちりめん街道	ちりめん街道散策 【旧尾藤家住宅】 ・江戸時代から丹後ちりめんで財をなした地元の名士の住宅跡。和と洋が融合する豪奢な作り。2002 年に京都府指定有形文化財に指定。
11:30	与謝野長観光協会	ちりめんコースター制作体験
12:20	バス移動	
12:30	千年椿の里 ちんざん	昼食。地元食材を使ったカモ汁そばを食体験。 振り返り、アンケート記入
14:40	バス移動	
17:00	京都駅	解散

（4）ツアー写真

集合場所

かやぶきの里を望む

八坂神社で旅の安全祈願

八坂神社で旅の安全祈願

鹿の解体体験

鹿の解体体験

１日目の夕食は鶏、鹿、猪の３色すき焼き

田歌舎の活動説明

狩猟体験

猟犬の位置を GPS で確認

鹿が山から下りてくるのを待ち伏せ

田歌舎のスタッフと

阿蘇ビジターセンター

与謝娘酒造の麹室見学

発酵樽

搾りたての日本酒を試飲

酒蔵の暮らしを聞く

地元の方との交流会

阿蘇海の鍋を囲んで

与謝娘酒造のお酒も

朝ごはんの準備をお手伝い

朝ごはんは地元の農家で

ちりめん街道散策

古い町並みが並ぶ

丹後ちりめんに触れる

丹後ちりめんの着物試着

ちりめんを使ってのコースター作成

集合写真

（5）参加者アンケートから

1.このツアーであなたにとって「この場所での特別なもの」になったことはありますか？

・長い時間をくだけた雰囲気で一緒に過ごした人たち。皆さんご自身の住んでいる地域や生き方にすごく情熱を持っており、それらを私たちと分かち合っていろいろお話を聞かせてくださいました。また、美しい景色、おいしい食事や飲み物、そして面白い宿。

・はい、美山では自給自足のライフスタイルが本当に気に入りました。野菜と米を育て、鹿を狩り、独自の生活スタイルを自分たちで作り上げていることが実に驚きでした。
与謝野ではサケとアユが人里近くで卵を産むというのにとても驚きました。私は大学で、それが健全な自然環境の指標だと習ったからです。与謝野の方々が大変な努力で自然を守ってきているのが素晴らしいと思います。

・はい、美山での狩猟体験が「自然に帰る」感覚を呼び覚ましてくれました。一度も田舎に住んだことがなく、子供のころから市街地にのみ住んでいた者として、食物を自分で集め、日常生活に必要なものすべてを自分で整えるという個人的体験をできるとは思いもつかないことでした。このプログラムでもっと自然に親しみ、他の生き方を体験できて幸運でした。

・「特別だ！」と思ったものがいくつかあります
１、美山で八坂神社に行ったとき。神社の周りの自然がとても美しく、水墨画のようでした。
２、自給自足の体験はとても興味深かったです。田歌舎の藤原さんや彼の周りの方々がゼロから作り出していること、すべて自分たちで建て、野菜を作り、獲物を狩り、若い世代に自然の中で生きる術を伝えていることが見られてよかったです。
３、二日目のお昼が特別でした。おいしかった。
４、与謝野の皆さんがすごく親切に歓迎してくださったこと。ありがとう！
５、みおさん（通訳案内士）は本当に素晴らしいインタープリターでした！
６、とてもおいしいサケ（日本酒）でした。
７、与謝野の着物が美しかった。

・このツアーで「特別なもの」になったものは特になかった。

・酒蔵が最高でした。田歌舎のレストランも気に入りました。

・狩猟はすごい体験でした。酒蔵がいちばん良かったです。

2.今回訪ねた場所を友達に薦めたいですか？ そうであれば、どのように紹介しますか？

・はい、ぜひそうしたいです。ソーシャルメディア（フェイスブックやインスタグラム）やＥメールを通して友達に勧めます。美山と与謝野に友達やその家族を連れて一緒に来るか、彼らを来させたいです。

・はい！ 私はこの三日間の経験をフェイスブックに書き、良い写真をたくさんアップします。そうすることで私の友人たちもこの地域を訪れてみたくなると思います。

・はい、友達も私と同じように都市部にしか住んだことがないので、このような地域に来れば新しい経験や日常生活に対する新しい見方もできるようになると思います。この地域へのツアーは彼らにとってもきっと忘れがたい思い出となるでしょう。

・今回ツアーで行ったすべての場所を友達に勧めたいです。でも、公共の交通機関でたどり着くのは大変だし、地元の良いガイドさんや会って一緒に過ごす地元の人がいないとそんなに面白くないかもしれません。この地域を紹介するなら、美しい田園地帯で伝統的な生活の知恵が地元の方々によってまだ引き継がれており、与謝野にはとてもあたたかく迎えてくれる人たちが

いると伝えます。
・この地域に特に興味のある人でなければ勧めない。
・こんどは夏に天橋立を訪れたいです。友人にもこの訪問を勧めたいです。お昼の鹿肉レストラン、あれはおいしかった。
・はい、勧めます。田歌舎の哲学を伝える必要と、美山－与謝野をワンルートにする必要があります。もし個人で行くならレンタカーを勧めます。

3.このツアーで不自由だったことがもしあれば、それはなんでしたか？あればよかったと思われるサービスや必要ないと思われる内容があれば教えてください。

・あの状況－寒くて濡れている－での説明が長すぎるときがありました。だいたいの話は面白かったのであまり気になりませんが、一度私にも知識があるテーマの時には、このバックグラウンドがある人間には説明がもっと詳しく専門的であってくれたらと思いました。「センセイ」が最後の「ヒトコト」で説明をさらにリアルにしてくれたのが嬉しかったです。
・ないと思います。私は日本文化をたくさん学んできたので、お話が本当に面白かったです。
提案：街歩きがもっとできると良いと思います。
・天橋立近くのインフォメーションセンターで聞いたような数か所は、話が長すぎてその話題（サケ？）に興味のない人にはあまり面白くありませんでした。そしてほとんどの説明が日本語だったので日本語を解さない外国人にはどうなのだろうかと思いました。
・１、かやぶき屋根の家に住んでいる人に会ってみたい。
２、もしツアーが冬に行われるのなら、もっと温かい施設が必要だと思いました。2 日目は狩りの間とても寒く、そのあと与謝野に着いてからもずっと寒いところを移動したので。
３、冬なら雪用靴か濡れても大丈夫な靴を持ってきたほうがいいです。参加者には冷たい川をスニーカーで渡っていた人もいて、そのあともずっと同じ靴を履いていたので具合が悪くなってしまうと思いました。
・美山の宿は外国人観光客には不向きである。さらに、外国人観光客は始終寒い中にいるのは得意ではない。
・魚に関するレクチャーは必要なかったです。その他はこのツアーのサービスはどれもよかったです。もし外国人に売り込むなら、朝銭湯に行くというのがあるといいです。そしてたいていの外国人は和室に座るのが苦手なので、椅子のある食堂というのがよいアイディアなのではないかと思います。
・田歌舎の宿泊ですが、冬は外国人旅行者には厳しいのではと思います。近隣にもっと快適なところを見つけてあげたほうがよいでしょう。与謝野町のはじめのところの説明とビデオがやや退屈でした。コースターづくりはどちらかというと子供向きです。ちりめんの本格的な製作過程を見るチャンスがありませんでした。

4.旅をするとき、どのように情報を集めますか？出発前と旅行中の主な情報収集の手段を具体的に教えてください。

・地元のインフォメーションセンター、ガイドブック、ソーシャルメディア、インターネット、友人、旅仲間。

・友人や年上の人に聞く、ウェブサイトを見る、（グーグルにキーワードを入れてみる）、ガイドブックを読むなど。主にインターネットに頼っています。

・ウェブサイトを見て、目的地に関するあらゆる事柄について調べます。宿泊場所に始まり、食べ物、生活の場など。

出発前にデータを集めておくと、旅の最中にするより時間もお金も節約できます。

・（このツアーの）出発前には情報を集めることはせず、プログラムを読んだだけでしたが面白そうだと思いました。OKU ツアー代理店で働いている友人のチサトが勧めてくれてこのツアーに参加できてよかったです。旅の間はメモを取り、地元の方々と話す時に質問をしました。

・旅をする前に行先のリサーチをし、訪ねたい場所をリスト化する。しかし、地元の人のオススメによってプランを変えることもある。

・「Japan-guide」のようなウェブサイトやロンリープラネットのようなガイドブック。そして駅か観光案内所で街の地図をもらいます。

・出発前にインターネットとガイドブック。旅の間は観光案内所に行きます。

5.このツアーの印象はいかがでしたか？地元の方々になにかメッセージはありますか？

・全体的にとても楽しかったです。
（みんなが選べるオプション的な活動があったらよかったのかな、と思います。人はやりたいことに対してはもっと興味をもてるものなので。）

・藤原さん、かわいさん、まいさん、田歌舎と美山のみなさん、生活をシェアしてくださってありがとうございます。

・うえださん、ゆきこさん、やすださん、にしはらさん、そして与謝野町の皆さん、心を開いてお家を開放してくださりありがとうございました。

・みお、まさきさん、伊藤さん、「センセイ」、この企画を、また楽しく美山と与謝野を紹介してくださってありがとうございました。皆さんは自分たちの仕事が大好きで、それを他の人たちと分かち合うのも大好きなんですね。これからもいい仕事を続けてください。

・素晴らしかったです、とても気に入りました。
どうか私たちの未来の世代のために、自然を守り続けてください。若い人たちが村に戻ってくるといいですね。美味しい食事や素敵な宿をありがとうございました。美山と与謝野の両方に観光のポテンシャルがあると思います。

・このツアーに参加できて本当に良かったです。ほとんどすべてが新しい体験でとてもワクワクしました。地元の方々はとても親切で、言葉の壁はコミュニケーションをとるのにハードルにはならないことを教えてくれました。

・１、このツアーはとても楽しかったです。与謝野の地元の方々は素晴らしく、優しかったです。それでもなお鹿を殺すことについてはずっと考えています。鹿肉はおいしかったけれど、あんなに穏やかな動物を殺すのは私にはまだとても難しいです。特に弾が頭に当たらず死ぬまでにとても苦しんでいるのが。地元の方々が命をいただく動物に対して深い感謝の念を持っていることはわかりましたが、実際に見るのは簡単なことではありませんでした…

２、また帰ってきて椿の木を見にいき、与謝野地区の自然の中をトレッキングしたいです。
３、着物を着て与謝野を歩いてみたいです。
４、またモニターツアーに参加してみたいです。オーガナイザーの皆さん、ツアーリーダーの皆さん、素晴らしい企画を、そしてご親切にしてくださってありがとうございました。
どうもありがとうございます！とても良い旅だった！

・日本の田舎に行く普通のツアーで、特に悪くもないが面白くもなかった。
・楽しかったです。食べ物はおいしく訪問先は面白く、酒蔵はとてもよかったです。あたたかなおもてなしをしてくださった皆さんに感謝いたします。
美山町のほうが与謝野町よりよかったです。酒蔵と、杜氏との夕食は本当に良かった。与謝野町の他のところはローカルでつまらなかったです。外国人観光客に対して心をひらいた態度というのはとても大切です。

6.今回のツアーの満足度

大変満足：4　　満足：1　　どちらでもない：2　　不満　　大変不満

(6) 現地開催者からの所感（1～3 はそれぞれに良かった点、悪かった点）

1.ツアーの企画、内容について

①美山町

・これまで何度か行ってきたツアーをベースに行ったので、ある程度参加者から出る反応を想定しながら出来た点では､今後インバウンドを受け入れる点において再確認出来る機会となった。
・活動として焦点を当てて行ったという点においては、美山町全体としてのブランディングがターゲット設定とこの事業の位置づけをリンクさせて考えるまでには至っておらず、ＤＭＯ機能の拡充という目的からすると不十分である。
・参加者にとっても、一施設のスタッフとの交流要素は強いが、住民との出会いという点においては欠けたあたりも反省である。

②与謝野町

・着物体験では女性はとても喜んでもらえたが、着物を着てからの楽しみ方まで準備できればなお良かった。加えて、週末で機場が休みだったので出来なかったが、実際に反物を織っている職人との交流も合わせれば、着物の良さを味わってもらえると考える。
・ちりめん街道内の機場を見学することは可能だが、休日で見学ができなかった。手織り体験も生の機場を見てから体験することで魅力が増すので、体験だけではイメージが沸きにくかったかもしれない。大きな手機織機も協会で持っているので、その活用も見据える必要がある。
・酒蔵見学は杜氏のキャラクターのよさもあり参加者にとても喜ばれた。この町の産業を作り上げてきたのが、約 4 億 6000 万年前に誕生した「大江山」から染み出す「水」。この水があるから人々の暮らしがあり産業（織物・農業・漁業）がある。もう少しこの「水」や地域形成の話ができていればよかったのかもしれない。
・日本の農家に入っての朝食は参加者にとって貴重な体験となった。しかし、時期的に収穫できる食材がなく、食べるだけになってしまった。収穫・調理・食べる、を一貫して体験できるプログラムとして今後は組み立てていく。

③全体として

・全く違う２つの地域での活動であり、それを一つのツアーとしてコーディネートするためのコンセプトとツアーターゲットを絞り込みが甘かった。
・一方で２つの地域がもっている素材そのものを出し、評価してもらい、次につなげるモニターツアーという点においては、良くも悪くもすべて出すことが出来た。

2.参加者への広報、集客について

・直前まで活動として流動的になり、本格的な広報が遅れた。
・主に「京都府」および「日本の窓」主たる２つの広報先から人を集めることが出来た。
・今回、参加費を１万円として実施して行ったが、これが実際に設定しようとする価格で今回の内容を発信した場合の集客を想定するとかなり不安が残る。
・地域として多様な地域からの参加者があり、活動を評価する上での参考になる。特に今後伸びるであろう、東及び東南アジア圏からの問い合わせ、参加が合った点についてこのような活動へのニーズを感じることができた。
・広報時に他のツアーが無料に対して、試験的に料金をとる本ツアーが、参加者にとって混乱させたようであり、参加費に関するアナウンスをした時点で多数のキャンセルが発生した。事前告知の方法や、モニターツアーというネーミングについても注意が必要である。

3.当日の運営について

・通訳および現地受入施設、与謝野町観光協会のみなさんの丁寧な関わりにより、当初予定していた内容については滞りなく開催できた。
・特に、通訳の方と事前に実施地域への下見および活動体験を丁寧に行っていたことが、当日の参加者への説明等につながり、そのことで、参加者自身の満足度につながったように感じる。
・ただ、2 つの地域で 2 つの仕組み（指揮命令系統）を統合する方法で行ったために、実際に起こる状況から鑑みて活動を変更するなどの調整がうまく行うことができなかった点もあった。
・より地域と活動への参加を行った

4.今後に向けて課題と展望

①美山町

【課題】

・美山町としてターゲット設定が必要であると改めて感じた。これは国籍別というよりも、美山町が発信したいイメージやメッセージ（これが結果としてまちづくりの基礎になる）を明らかにした上での興味や嗜好別でのターゲット設定が必要である。
・特定地域（かやぶきの里や芦生の森）に偏っている観光客をほんとうの意味で地域全体に来てもらえるように、コンテンツや事業者の掘り起こしとそれらの連携がこれからの課題である。

【展望】

・今回の美山町全体をフィールドした際に、今回の活動を基軸として、他の活動がどの位置づけ（ターゲットや目的、季節など）にあるのかを可視化した上で、そこから見える美山町全体の風景を映し出すことができるような地域の価値創り込みＤＭＯの構築を行いたい。
・そのためのステップとして、現在ある美山町の観光に関する各種団体へのとりまとめを南丹市美山エコツーリズム推進協議会と行いつつ、販売・営業してもらえる協力者探しをしたい。

②与謝野町

【課題】

全体を通して、ターゲット設定ができておらず何を伝えたいのか、また味わってほしいのか、が見えなかった。この町で何に価値があるのか、ないのか、を試させてもらった部分が大きかったので参加者には不満が残る場面もあった。また、全体的にプログラムを詰め込みすぎていたことも問題だと考える。

【展望】

今回外国の方から、自然を活かした自転車の活用や文化面の活用など貴重な意見をいただいたので、地域にフィードバックして新たなプログラム設計に繋げていきたい。ターゲットを女性に絞り「着物・織物」といった産業をより深く味わえる部分に更に力を注ぎ新たなブランディングを生み出したい。

③全体

・「地域外のマーケティング・集客を行うＤＭＯ」と「地域の価値創り込みＤＭＯ」の２種類のうち今回の野生復帰計画の位置付けとしては、前者かもしれないが、より地域の前者を例えば「日本の窓」のようなすでに、多くのインバウンド旅行者を取り扱う旅行会社に委ね、後者の機能を野生復帰計画および与謝野町観光協会が担っていくというのが、ＤＭＯとして望ましい形でありそうだという仮説が導ける。

・このように整理すると、後者がその地域におけるターゲット設定（特に誰に来て欲しいのか？誰に来てほしくないのか）と地域ブランディング（自分たちがどのような地域でありたいのか）を明確にし、それを理解して送客してくれる前者との関係性を構築することが極めて重要であるように感じる。

・また同時に、一体型は別として、前者は広域的なＤＭＯではなく、ターゲット別やコンテンツ別での方が有効に機能するのではないかとも感じている。

記入者：青田 真樹（野生復帰計画）

記入者：安田 光樹（与謝野町観光協会）

★モニターツアーから見えてきたインバウンド受入の方向性

第Ⅰ章で全体的な総括と考察を行っているが、今回実施したモニターツアーでは個別に以下の事項が抽出できた。

①広報・集客に関しての抽出事項

・すでに世界的に認知されるインバウンド受入の情報サイトによる集客が効力を発揮

北海道鹿追でのモニターツアーでは、海外からの観光客にすでに広く認知利用されている『北海道宝島トラベル』がモニター募集を行い、マレーシアからの訪日観光客をモニターとして参加いただいた。また大分県臼杵では、こちらも世界的に認知され利用者の多い『日本の窓』がモニターを募集し、すぐに参加者が集められた。

一方で、東京のユースホステルに集客の協力を依頼した新潟県かみえちごのツアーでは、予想に反してモニターの応募が伸び悩む結果となった。都内のユースホステルには、連日多くの外国人旅行者が宿泊し、ここでの口コミによる情報発信も期待される。ユースホステルやゲストハウスを利用している旅行者には、岡山のように拠点から手軽に参加できるツアーには参加が集まりやすいが、移動距離が長く時間がかかるものはハードルが高い。その地域内をめぐるものが有効と思われる。

また、外国人にとっての知名度があるかどうかが大きなポイントになると見られる。名前を知っている、ここに行ってみたいと思わせるわかりやすい訴求（決定的な景観など）が大きい。外国人の出身国によっても傾向が異なるが、それぞれの属性に通じる言葉やイメージを用意する必要がある（例えば、ヨーロッパ人なら馬の文化からとか、アメリカ人ならロングトレイルを歩くアドベンチャーであるとか、中国人なら生活文化からなど)、ユースホステルを利用する外国人旅行者に合わせたマーケティングや広報戦略が求められる。

ネット上の情報で世界から集客している『日本の窓』としては、送客元と受け入れ先とでしっかり対応のできる信頼関係があることと、地域の方とのつながり、柔軟な対応力が求められる。一概に何らかの条件を示してクリアする関係ではなく、臼杵の事例がモデルとなるが、受入地域ができることを越えずにコーディネーションする体制が重要と指摘される。

・「ＤＭＯ」と「ＤＭＣ」の二重の構成が機能する

北海道の関係者により既に仮説化がなされているが、インバウンドを語る時の「外に向けたプロモーションに重きを置いた Destination Marketing Organization」と「現地で顧客に経験を提供する Destination Management Company」の二重の構造が、地域に根差したグリーン・ツーリズムを海外マーケットに届ける際の理想的な形であると言える。その背景には、現実的にマーケティングとマネジメントを一つの組織で行うことが難しいことがある。ＤＭＯとＤＭＣの二重構造で対応することで、質の高い展開へとつなげられるが、同時にコストアップにも通じることが指摘される。

これは他の地域にもあてはまり、いかに地域で質の高い旅行商品を作っても対外的に認知の進まない状況では集客にはつながらない。一方で国際マーケットの動向に集中するＤＭＯが、国内の多種多様な観光商品の質を管理するのは無理がある。各地域の観光商品の質は、その地域を熟知したＤＭＣが地域独自の価値を創り込むことで日本らしいグリーン・ツーリズムとなる。今後の全国での展開の可能性を考えれば、北海道のようなケースのほか、地域ごとに形成されるＤＭＣをつなぎ、外に向いた DMO 機能を果たせる組織、もしくは情報サイトと連動していくスタイルが期待を持てる。

・すでに外国人旅行者が訪れる宿泊拠点を活かす

岡山県倉敷ではすでに多くの外国人旅行者が利用している有鄰庵が拠点となり、モデルプランの立案、地域のコーディネート、モニターの募集を行った。有鄰庵のように地域精通を図り、かつすでに多くの外国人旅行者を集める実績をつなげることで、新たなＤＭＣの形として機能できると捉えられる。有鄰庵は１軒の宿というよりはＤＭＣと位置づけられよう。

有鄰庵は、立地的には農村エリアではないものの、まずは旅行者が多い都市部の宿泊地を拠点として現在でも多くの外国人が利用している。高梁川をテーマに、そこのお米、水、玉子で卵かけごはんを開発し、宿で出すほか、その生産地をめぐるツアーを企画し、その地域の価値を創り込み高めている。

そうしたゲストハウスが集客装置になること。つまり既存の外国人からの口コミと外国人ライターを起用したブログや動画発信で自らが集客し、地域にお客を送るＤＭＯの機能を果たそうともしている。ＤＭＯとは本来は、より広く大規模なプロモ―ションを行う組織であるが、小さな農村にはそんな大人数の旅行者はキャパシティオーバーとなる。そう考えると、ＤＭＣがＤＭＯを担うことも、規模によっては効率的で有効と思われる。

宿泊拠点がＤＭＣとして機能していく形の場合、送客エリアや交通手段については、旅行者にとって参加しやすさがポイントであり、近隣地域で日帰り、またストーリーとして魅力的なコンテンツの充実が求められる。

・日本在住の外国人（リージョナル）のネットワークを活かす

新潟県かみえちごでのツアーでは、在日の中国人ネットワークでモニター募集の情報を流したところ、かなりの反響を得た。モニターツアーとしては参加年齢のしぼりを行ったため人数は少なかったものの、すでに日本に住む外国人にも日本のグリーン・ツーリズムのコンテンツは魅力的であり、これまで情報としても得ていなかったものだという。

日本在住の外国人の間での情報網がしっかりとできているほか、本国への情報発信にも効果が期待できる。今後、在日外国人への情報提供はじめ、しっかりと顧客開拓のアプローチすることにより、訪日旅行者の増大につながる可能性が高まる。

影響力のあるブロガーを巻き込むという手段もあるが、訪日外国人への広がりを考える上で、日本在住の外国人からの情報発信に期待が寄せられる。それぞれの言語圏や外国人コミュニティが形成されてきているので、はじめから膨大な数の世界の未知なる旅行者に発信するのではなく、母国語で同郷者が語る情報から広げていくという発想である。ＳＮＳで発信する人を増やすことについて、発信したいと思わせる現地での体験、風景や食、人との交流、その地ならではのものなど、絵としてわかりやすいものの提供が重要となる。

②ツアーでのプログラムの組み立て方

・１つのツアーで多くの体験を盛り込みすぎない

モニターツアーでは、現地の要望から外国人旅行者に試したいコンテンツを盛り込んでいたが、実際のツアーメニューでは、多くのコンテンツを詰め込み過ぎず、シンプルなテーマ性やストーリー性を際立てたものが求められる。

今回のモニターツアーでも、京都でのツアーではターゲット層の設定と中身のコンテンツの量とで、参加者から指摘があった。岡山のツアーでもコンテンツが多すぎる指摘があった。同じ２泊３日でも臼杵のツアーでは、柔軟な地域の対応が加わり、参加者の印象も良く、１泊２日のかみえちごでも時間の取り方に余裕を持たせたことで、参加者にとってもストレスのないプログラムとなった。

ツアープログラムを作る際、どうしても参加者へのサービスも意識して、多くの体験プログラムを入

れがちになるが､旅行者は必ずしも対価のかかる特別な体験を求めているのではないことがうかがえる。グリーン・ツーリズムでいえば、その地域の普通の暮らしや時間、人との交流にニーズが寄せられる傾向が見られる。

時間刻みのプログラムは好まれず､ゆっくり旅行者の感覚で地域に入る構成が望まれる傾向があった。ツアーとして組むのであれば、多くても２つ３つの要素にとどめ、できる限りそのつながりや流れをつけることに留意したい。合わせてコンテンツやストーリーをシンプルにすることで、地域の魅力を端的に表現できる。

・地域の人との普通の交流、地域の普通の時間が何より重要

インバウンドの受入にあたり、多くの地域で言葉の問題や慣習の違いが心配されるが、モニターツアーの実績からみると､受け入れ地域での特別な対応や､精度の高い通訳力は重視されていない｡むしろ、地域のいつもの暮らし方、自然な人とのコミュニケーションに外国人旅行者は魅力を感じており、特別な食事や体験よりも「その地域の日常」「普通の時間」が求められる。ツアー実施の場合、全体をコーディネートするコンダクターには外国語によるコミュニケーションが求められるが、地域の人との交流にはできる範囲で人同士がコミュニケーションしていくスタイルで十分と言える。

・その地域ならでは、その時期ならではの魅力を打ち出す

当然のことながら、どこの地域でも同じ体験ができるものは魅力とはならない。その地域のＤＮＡに照らし、地域全体でこの地域はこうであるというコンセプトの構築が何より重要となる。1 つのツアーであれば、なおさらコンセプトがしっかりと通ったものである必要があり、その地域に来たことの喜びを最大限伝えられる構成が望ましい。

合わせて、地域に置いての「旬」に意識を向けておきたい。上越後のモニターツアーでは、サケの遡上と新米の時期にあたり､これがツアーの魅力となって打ち出せた｡合わせて紅葉が美しい時期であり、参加者はこうした時期の特別性に大いに魅力を見出している。

③広報や情報面でのインフラ整備

・まず最低限に英語による発信ツールを持つ

モニターツアー参加者のほとんど全員が、ツアーでの体験を大変喜ぶ。そしてどうしてこうした情報がないのか疑問を投げかける。どこで情報が得られるのか、外国語のホームページはないのか、そこへの行き方はどうしたらいいのか。外国人旅行者にとって（在日外国人にとっても)、どこで、どんな魅力ある体験や交流ができるのか、それはどうすればアクセスすることができるのかなどの情報をまず求めている。現状では多くのグリーン・ツーリズムの存在についても、それぞれの特性やその地ならではの魅力的なコンテンツが届いていない。基本情報として外国語で用意すべき内容をまず理解し、その適切な表現で用意する必要がある。

・公共交通機関の拠点に、まずは外国人向けのインフォメーションを

先行事例として広く取り上げられ今回も研修会の現場として選定した長野県飯山では、北陸新幹線の開業とともに駅舎がリニューアルされ、カフェやインフォメーションを行う情報拠点、駅から動けるレンタサイクルや装備のレンタル、地域でのプログラム予約などを一括してできる仕組みを作り上げている。

外国人旅行者は、新幹線で駅まで到着すれば、地域の情報や移動手段がそこに揃っており、駅でプロ

グラムも宿泊も予約することができるサービスができている。

そのためにそれらの提供を可能とする予算や運営組織が必要となるが、飯山市の場合、信州いいやま観光局という組織がそれを担っている。地域版のＤＭＯである。ここではいかに外国人旅行者が地域を旅行しやすくなるかの視点で、基本的なインフラの整備が進められ、地域とともに外国人旅行者の受入が進められている。

・どういう人に、どのように来てもらいたいのか、地域としてのイメージを打ち出す

グリーン・ツーリズムでは、端的に入れ込み客の増大のみを目的とし、だれかれ構わず受入の数を上げることを望んではいない。主たる生業は一次産業であり、生産を第一にとらえるのは当然のことである。生産の妨げにならず、外国人旅行者を無理なく地域のキャパシティで受け入れることで、地域の産物の販路拡大や六次産業化の実現に寄与することが求められる。

そのため、地域側から対象となる旅行者像やそこでの過ごし方を示したり、イメージさせる打ち出しをすることも重要となる。地域で求めていること、慎んでほしいこと、こんな過ごし方、楽しみ方を奨励していることなどを、動画などを使い発信することが望まれる。

農林水産省
平成 27 年度　都市農村共生・対流総合対策交付金事業
（広域ネットワーク推進対策）
教育・観光・健康福祉と連携した取組の推進
＜外国人旅行者向けの受入体制の構築事業＞

＜本事業についての問合せ先＞

ＮＰＯ法人 日本エコツーリズムセンター
〒116-0013 東京都荒川区西日暮里 5-38-5
Tel：03-5834-7966　　Mail：desk@ecotourism-center.jp

資料作成：日本エコツーリズムセンター　　2016 年 3 月
※本資料について無断での複写、複製、転載等を禁止いたします。
ご希望の際には上記連絡先までご一報ください。